

## 意見陳述書

2018（平成30）年10月10日

佐賀地方裁判所民事部合議2係 御中

原告 加藤 裕子

- 1 2011年4月20日午前8時、私は小学5年生になった娘とともに大阪梅田駅に降り立ちました。通勤客がひっきりなしに行き交う構内を眺め「大阪に着いたね。今日から大阪生活が始まるのよ。」と娘に話しかけました。

福島市から大阪に避難することを決めたのは、いち早く罹災証明なしで区域外避難者の受け入れをしてくれたからです。

今、私は、子どもとともに、原発賠償関西訴訟の原告となり、原発事故による福島と避難者の現状を伝え、徹底的な事故の究明と責任の追及、被害の完全賠償、事故の再発防止を訴え、「一人も被災者を取りこぼさない施策」の実現を目指しています。そんな中、玄海原発の全機廃炉を訴える方々とのご縁があり、福島の原発事故の一被災者として裁判所に直接意見を陳述させていただく機会をいただきました。

- 2 私は、2007年の秋、ドイツ人の夫と離婚し、娘とドイツから帰国しました。日独双方のルーツを持つ娘の母国語を日本語にしたいと思ったためです。そのため、私の実家のある福島県福島市に移住し、実家の近所に家を借りて生活をしておりました。

娘は、ドイツでは日本人幼稚園に通っていたものの、生活の中心にはドイツ語があり、母親の私から見ても日本語の語彙が少ないことが気が

かりでした。娘は、福島に住み始めた時のことを振り返り、「日本に来たばかりのころは大変だったんだよ。先生や同級生の福島弁がわからなかったんだから」と言います。普通の日本語ですら十分でないのに、さらに福島弁で話される言葉を理解するのは大変だったんだろうと思います。それでも、娘は、その福島弁にも慣れようとし、たくさんの友人を作り、小学校4年生の3学期からは吹奏楽部にも入部して、5月のコンクールに向けて練習を重ねていました。

そんななか、3月11日14時46分、あの大地震が起きました。

その時、私は、福島市の職場におりました。

その日のうちに電気、ガスが止まり、翌日には水道が止まりました。

そして、福島第一原発の事故が起きました。

この時、私は原発の事故というものがよくわかりませんでした。停電によりテレビが見られなかったことと、「原子炉建屋が吹き飛んだ」というあいまいな表現でしか報道されていなかったからと思います。

ですが、3月15日には福島市の放射線量が**毎時 23.88  $\mu$  Sv**になりました。それは通常の600倍という数値でした。

米軍は軍関係者に対し福島第一原発から80km圏内への立ち入りを原則禁止にしました。また、それとは別に、在日アメリカ大使館は、福島第一原発から80km圏内に居住するアメリカ人に対し圏外退避を勧告しました。

私が住んでいた福島県福島市は、福島第一原発から北西に60kmでしたので、不安と恐怖を感じました。東京の友人はもとより、ドイツに住んでいる元夫の家族からも「大丈夫なのか？」と何度も確認の電話が入りました。

私は福島市に降り注いだ放射線量の安全性について情報を求めました。放射能の単位から、チェルノブイリの事故、東京電力からの情報や海外

の報道も調べました。調べれば調べるほど恐ろしい現実と向き合わざるを得ず、心の平穏を保つことだけで精一杯でした。

テレビや新聞は一様に「屋内退避」としか言ってくれませんでした。

そんな中、生活のためには屋外に出ざるを得ませんでした。地震でライフラインが止まっていたからです。私は水・食料・燃料を得るために外出して、長蛇の列に並ばなければなりません。生きるためには被ばくをしなければならなかったのです。

- 3 まもなくすると私は毎日夕方になるときまって下痢を起こすようになりました。子どもは腹痛を訴え、鼻血を出すようになりました。

福島市は安全なのか？危険なのか？私は福島大学の教授が多く登録をしているメーリングリストに疑問を投げかけました。すると、面識のなかった大学の先生からダイレクトメールが届きました。「MLに投稿しようと思ったのですが断念しました。「どうか安全だと言ってください」というのが空気のようなので、事実はともかく…。何かのご参考になれば。各種情報にご留意され、くれぐれもお大事でお過ごしください。」というメッセージとともに、いくつかの情報へのリンクが貼られていました。

それらの情報では、専門家の間でも「100 mSvまでは安全」という人と、「安全な被ばくはない」という人に分かれていました。専門家すら見解が分かれるのであれば、素人の私が判断することはとても困難でした。

ですが、すべて読み終え、放射線の影響に「しきい値」はないということが世界の共通認識であると知り、避難することに決めました。事故発生から、約1カ月がたっていました。

- 4 私は、福島の家族や友人知人に調べたことを伝え、避難の必要性を訴えました。しかし、国や福島県の発表を受け入れた彼らは、「県も国も避難指示をしていないのになぜ避難する必要があるの」という冷ややかな

反応しかありませんでした。中でも一番辛かったのは、娘の反応でした。

「私、もう転校したくない！友達と別れたくない！せっかく始めた吹奏楽をやめたくない！誰も転校してないし！」と言われたときは、どう説得したらいいのかわかりませんでした。

ですが、子どもは大人に比べ放射線の影響を受けやすいことを知ってからは、一日も早く福島を離れたいと思いました。私は心を鬼にして「大阪に行くからね。」と娘に言いました。

- 5 「避難する」とは決めたものの、公共の交通機関は地震の影響で止まっていた。また、避難先を探すものの、震災当初は「罹災証明」がなければ公営住宅への避難入居はできませんでした。すぐに逃げたくても逃げられなかったのです。これほど恐怖を感じたことはありませんでした。

「一体どうしたらいいのか？」困惑していると、「大阪では罹災証明なしでも受け入れている」との情報が届きました。早速大阪府庁へ問い合わせをすると「直接申込に来てください」とのことでしたので、高速バスの再開とともに西を目指しました。

福島から大阪までは高速バスで片道 11 時間でした。大阪府庁で申し込みをし、福島へとんぼ返りをしました。住居の引き払い、荷物の梱包、不用品の処理、電気・ガス・水道の廃止手続き、学校への転出手続き、自治体への転出手続き、家族や友人知人への挨拶などを 1 週間で行いました。

福島で過ごす最後の日、私たちは実家に立ち寄り夕食を共にしました。いつになく静かな食卓でした。福島駅のバスターミナルまで車で送ってくれた父が「大阪の方が子どもにはいい。」と呟いた別れの言葉が胸を締め付けました。高速バスの窓から見慣れた景色が流れていきました。なぜ私たちはこんな形でここを後にしなければならないのだろう。父や弟

家族、友人たちは元気に過ごせるのか？とやるせない思いがこみ上げ、理不尽な別れに号泣したことは忘れられません。

- 6 このような思いでたどり着いた避難先での生活は苦勞の連続でした。避難仲間も探せず、引っ越しの片づけから、店探し、電化製品の調達などをすべて一人でしなければなりませんでした。

娘も、クラスメイトときちんとお別れしないままの突然の転校に、みんなは元気に過ごせるのか？会いたい…とクラスメイトからの手紙を読んでは納得いかない怒りを私へ幾度もぶつけてきました。

私は夜になり、娘が寝静まると、心細さと理不尽な現状に一人涙する日が続きました。

そんな中、避難先が大飯原発から 60 キロの場所にあることがわかりました。福島第一原発から 60 キロの福島市から逃げてきた私はこの上ない衝撃を覚えたものでした。

「また避難したくない」「私たちと同じ苦しみを誰にもさせたくない」という気持ちから、京都市長選挙の脱原発候補者の応援弁士を引き受け、大飯原発再稼働時には現地へ出向き反対の声をあげました。

- 7 災害は忘れた頃にやってくるといいますが、ここ数年は、忘れる間もなく、次々と災害がやってきました。原発が稼働している限り、いつ、私たち同様、ふるさとや生活すべてを一瞬にして奪われる事態が起きないとは限りません。

今、**国**と福島県は、「復興」の二文字を掲げ、帰還政策に力を入れています。私が福島に戻らない理由の一つにこれ以上被ばくしたくないということがあります。私たちはいったいどれほど被ばくをさせられたのか、初期被ばく値を調べたいと思っていたところ、避難先の支援者から初期被ばくのおおまかな数値が計算できるというエクセルシートをいただき、計算したことがあります。2011年3月15日から3月25日まで

のたった 10 日間だけで、1.5 ミリシーベルトという結果でした。この結果には、驚きと同時に怒りが再燃したものでした。一般人の年間許容被ばく線量が 1 ミリシーベルトといわれているからです。

2018 年 6 月 18 日に公表された福島県民調査報告書によると、福島県の甲状腺がん及び疑いの子どもたちは 198 人になりました。娘も毎年甲状腺がん検査を受けていますが、毎回、結果が出るまでは気持ちが落ち着きません。無用な被ばくをさせてしまった罪の意識はこの先もずっと消えることはありません。

8 今日、傍聴席には高校生になった娘も座っています。彼女は、福島原発事故後、このような言葉を書き残していました。

「こんな苦しい思いをしている。そして、体験をしているから、私は、脱原発、反原発、がれき受け入れ反対という権利はあると思います。」

福島からの避難当初、私が様々な場所で避難の話や原発の話をしている間、彼女が画用紙に書いていたものです。

福島の事故で人々が生活や仕事を奪われている様を見て、「根こぎが行われている」と表現した作家がいました。「根こぎ」とは、根を下ろしている植物を徹底的に抜いてしまうことです。

福島でのつらい経験をしているからこそ、私は声を大にして言います。

「ふるさとを奪い、人々を根こぎにし、分断させ、苦しめる原発はいらない。」

私たちの心からの叫びが九州のみなさまはもとより、世界中の人々に届くことを強く願います。

以上

こんなくらしい思い  
をしている。そして、体験  
をしているから、私は脱原発  
反原発、がしきうけいれ反対とい  
**けんり**はあると思います。

前・福島からひなんした子ども